

L (結婚1年3ヶ月)  
男 結婚して、家庭を持ちたかった。そばにいて欲しかった。(25歳)  
女 ずっと一緒に生活したいと思っていたので、ある程度相手を理解できたと思った。(26歳)

I (結婚3年)  
男 遠距離恋愛で、お金が続かなかった。波長が合うような気がした。(27歳)  
女 私のことを、一番理解してくれそうだったから。(27歳)

F (結婚4ヶ月)  
男 自分の考えをはっきりいえる彼女が魅力的だったから。(31歳)  
女 彼が仕事も家庭も一緒に両立していこうと言ってくれたから。(24歳)

A (結婚3ヶ月)  
男 ずっと一緒にいたいと思ったから。(28歳)  
女 同じ家に帰りたかったから。(26歳)

M (結婚6ヶ月)  
男 つきあい初めの頃から結婚を意識した。温かい家庭にあこがれて。(30歳)  
女 様々な角度からみて、一緒に生活してみようと思った。なんとなく合うと思った。(31歳)

B (結婚1年1ヶ月)  
男 数あるサンプルの中から良品を選んだ。愛があったから。(27歳)  
女 付き合った年数が長かった。長所・短所も分かっていたので。(23歳)

N (結婚8ヶ月)  
男 学生時代から長く付き合っていた。家を継がなければならなかった。(29歳)  
女 仕事を続けたかったが、相手が積極的だったから。(28歳)

結婚している  
若いカップルに聞きました  
**結婚を決意した理由をおしえてください…**



C (結婚1ヶ月)  
男 仕事に自信がついた事。ふたりの将来像が一緒だったので。(27歳)  
女 独身生活を十分エンジョイしたので、今度は、結婚・子育てを経験して女性として完成していきたいと思ったから。(26歳)

O (結婚1ヶ月)  
男 価値観が同じだったので。仕事に理解を示してくれたので。(23歳)  
女 やさしい。年齢のわりにはしっかりした考えを持っている。結婚したかったから。(22歳)

J (結婚1年)  
男 仕事が軌道にのりはじめた経済面で生活が安定してきた。(25歳)  
女 先方の親が「自分達の生活は自分達でみるから、あなたたちの生活は自分たちで築きなさい」と言ってくれたので。(26歳)

G (結婚4ヶ月)  
男 ある程度つきあって、この人なら大丈夫かどうか判断した。(34歳)  
女 仕事を続けていくことに理解を示してくれたから。(28歳)

D (結婚3ヶ月)  
男 自分と自分の両親の幸せを考えて結婚した。(28歳)  
女 タイミング、年齢、キャリア、子どもを考えると26歳が適齢期だった。(26歳)

P (結婚2年)  
男 相手をもっと幸せにしたいと思ったから。(26歳)  
女 自分のことは、自分でしっかりとできる人だったから。(24歳)

K (結婚2年)  
男 つきあいが長く、一緒にいていつも新鮮な気持ちでいられたから。(28歳)  
女 子どもができて働き続けることを理解してくれたから。(27歳)

H (結婚5ヶ月)  
男 特に決意したわけではなく自然とそうなった。(29歳)  
女 大好きだったから。(25歳)

E (結婚2年)  
男 自分にあつた人だと思ったので。(35歳)  
女 周りはムコ養子をと考えていた。結婚するかも、という予感があった。(34歳)

# 転職の中から見つけたふたりの夢

～自然と一体になる生活をしたい～

現在



～富士宮市在住～  
〈夫〉 仁藤光晴さん \* 〈妻〉 仁藤慶子さん

◇結婚年数：12年  
◇家族構成：夫婦(30代)、13歳(女)、11歳(男)、10歳(男)、5歳(女)

◇結婚を決意させた事  
〈夫〉いつも一緒にいたかったから  
〈妻〉高校の時から同級生で、気心が知れていたから  
◇趣味  
〈夫〉家畜の世話  
〈妻〉リース作り、料理



## 転職を繰り返して

結婚した当初、僕はサラリーマンでした。でも人に使われることが苦手で家具を作ってみたりしたのですが、営業が難しく諦めました。その後、大学時代に取得した資格を生かし、塾の講師に挑戦しました。

しかし、個性を伸ばすのでなく、逆につぶしてしまうような詰め込み式の教育に疑問を持ったのです。自分の子どもには、こうした競争社会で揉まれるのではなく、個性豊かにのびのびと育てたいと願いました。

妻は、この気持ちを受け入れてくれました。ちょうど四人目が誕生した時でした。もう、後戻りは出来ません。「今度こそ、本当にやりたいものは何か」を真剣に話し合いました。「どのようになりたいのか」僕たち夫婦は、このテーマについて以前から話しあってきました。

見つけた！僕たちのライフワーク  
僕は自然に触れ、自然に溶け込み、自然と一体になる生活！それを理想としていました。そんな時、新聞に「マツシユルムの委託栽培」の記事が掲載されました。もちろん土地は貸してくれます。

そこで、平成元年、会社へマツシユルムの研修に出かけ、二年の春には栽培にこぎつきました。開始当初、収入が少なくて最低限のものだけしか買えず、極力、家計費を切り詰めた。家も、仕事場も、それまで専業主婦だった妻と二人で建てました。収入の面だけでいえば、今もなかなか楽ではありません。二人で働いてやっと一人分です。しかもマツシユルムは生き物なので、こちらの予定どおりにはいかず、湿度の影響で、急ぎょ収

獲するようないくつかあります。忙しい時は、家族総出で働きます。共に農業にかかり、苦勞を分かちあつていく中で、妻の意識が変わっていききました。

高校からの長いつきあいで、お互いの性格は理解していました。しかし、生活のすべてを二人で作ってあげていくことは、お互いに言い合うこともありません。でも、そんなことを繰り返すうちにだんだんと相手の気持ちが分かってくるんじゃないでしょうか。

夫についていくだけいいのだから私(妻)は、ここで家畜などを飼うことによって、生命の根源に触れることができると。誕生したものですべてが育つのでなく、半分は死んでしまっています。その生死にかかわり、命の重みを感じる一人の人間として、どう生きるか深く考えさせられます。

このことは、子どもたちにも良い影響を与えてくれたのではないかと思います。また、夫を助け子どもを育てることが、今現在の私を最大限に生かすことです。

それでも一時期は「夫についていくだけでいいのだから」と悩むことがありました。しかし、農業を営むことにより、二人とも同じ方向に向かって歩いていることが分かってきました。自然の中で暮らしていると、まわりの価値感に影響されなくなりました。俗にいう、いい暮らしができなくても精神的に満足でき、子ども達がお互いに助け合い、不便な点を補いつつ、感性豊かに育ってくれたことが私達の誇りです。「今の委託栽培から早く独立して自分達だけで経営できる」といいね」と二人の夢はふくらんでいます。

# はりきりすぎないで困っていたら一緒に考えていこう

1988年頃

現在



～岡部町在住～  
〈夫〉 小山照夫さん \* 〈妻〉 小山みや子さん

◇結婚年数：7年  
◇家族構成：夫婦(40代)、17歳(男)、15歳(女)、10歳(男)

◇結婚を決意させた事  
〈夫〉彼女の気持ちの転換の早さが良かったから  
〈妻〉友達感覚でずっとつきあっていたから  
◇趣味  
〈夫〉仕事  
〈妻〉骨とう品、陶器を集めること



## 先妻を亡くし、悪戦苦闘の毎日

先妻を病気でなくした僕は、当時小三の長男、小一の長女、五ヶ月の次男を抱えていました。両親が近くにいないので、最初に困ったことは、次男のことです。ゼロ歳児保育の保育園は見つからず、途方にくれていた時、ある保育園の園長が、同情して預かってくれました。「地獄に仏」とは、このことかと思いました。

次に困ったことは、夕食の支度や子どもの世話です。役場にヘルパーを頼んで来てもらいましたが、子どもがなつかず、結局、自分ですることになりました。仕事の関係で、一人を毛布に包み、二人の子どもの手を取って、再び会社に戻るという生活を四年間続けました。子どもたちに、さみしい思いをさせました。男手で子どもを育てることは無理ですね。食事の支度などは何とかできるけれど、男親は結局、女親にはなれないんです。

## 彼女の一言

「奥さん亡くなったんだってね。今どうしているの」と幼稚園の時から同級生だった彼女の電話がきっかけで、彼女が僕の家へ遊びに来るようになって、だんだんと意気投合して結婚しました。「仕事も、家庭も張りきりすぎないで、困っていたら一緒に考えていこう」という彼女の一言が僕の気持ちを支えてくれたのです。

やってみなければわからない私(妻)が、上司に結婚することを報告すると、今までの事情を知っている上司は「何も結婚しなくていいよ、友達同士でいけなさい」と反対しました。負けん気の強い私は、「やってみなければ分りません」と啖呵を切って結婚し

## たのです。

保育園育ちの次男が、家庭のぬくもりを味わっていないと感じた私は次男が小学校に入学する時、温かい家庭をつくってほしいと思ひ、辞表を提出しました。けれど上司は「駄目だ」と言いつけてくれませんでした。「会社は私を必要としてくれているのだ」と思った私は、夫と相談し、無理を承知で、次のことを理由に四か月の休みを要求しました。一つめは、子どもにお帰りのさいという言葉を言ってあげたい。二つめは、ご近所と付き合いたい。三つめは学校の様子をよく知りたいという事です。意外にも、会社は承知してくれたのです。

## 五百円玉で五十万円のために

会社の理解をありがたく思いました。私のようなケースは例外かもしれませんが、でもこれからの企業は、個人個人の事情に配慮した労働契約があってもいいのではないかと考えています。五百円玉で五十万円のために：パート業という職業柄、帰宅時間が遅いことや、休みが日曜日でないことなどで家族みんなで食事をしている時間は少ないです。でも、私や夫が帰ってから、たとえ三十分であっても、家族で語り合う時間を大事にしています。ときには、教育の方針などで夫婦で喧嘩になる時もありますが、二人の考えを確かめ合う場にもなっています。

子どもが寝静まった十時以降は、二人の時間として大切にしています。最近、定年後をどう過ごすかということとを話すようになりました。今、貯金箱に五百円玉を少しずつためています。次男が二十歳になる頃には、五十万円くらいたまるといい。その時には、二人きりの新婚旅行を実現できたら、という夢を描いています。

## 専門家からのご意見

### 現代の離婚事情

牧野 百里子さん



プロフィール  
現職/弁護士  
主な著書/遺言執行の法律と実務(ぎょうせい)、特殊担保・保証の実務(新日本法規)(共同執筆)等

子どもがいても「自分の生き方」を求める「子はかすがい」と言われて、以前は子どもがいると離婚を思いとどまる夫婦が随分いました。あるいは、世間体を気にして我慢したものです。しかし、今は子どもがいても「自分の生き方」を大切にしたい、離婚にいたるケースが増えています。社会も親も、それを容認する傾向にあります。

## 結婚生活への認識の甘さとズレ

結婚に対しての認識が甘いと、独身時代の夢だけをひきずって一緒に暮らすことになりがちです。しかし、育った環境が違うのですから、自ずと生活習慣も異なっています。その上、個性が違う二人ですから認識のズレから誤解を生じ、ぶつかりあつてあたりまえです。こんな時、相手の気持ちを思いやり、良さを認める心の余裕がないと破綻はやってきます。結婚して今まで考えていた事と違うと努力がまんもしないで別れてしま

う夫婦がいます。実家の親も若く、経済力があると「いやになつたものは仕方がない、戻っておいで」と、孫共々ふところに入れてしまう傾向があります。また、仲が悪いのなら、別れたほうが良いと努力も歩み寄りもせず、短絡的に考える人が多くなっています。本当に大人の男として女として自立しているのでしょうか。「マザコン」なるものも、その現れですが、「夫婦」より母親と息子の結び付きが強いのです。

若い人だけでなく、熟年の離婚も増えています。この場合、子どもの自立や夫の退職を契機に離婚に至ります。長い間、積み重ねてきたものが壊れてしまふのですから大変なエネルギーの消失です。

こうした離婚の多くは、夫が仕事中心で家庭を顧みなかったり、妻以外の女性に愛情を求めたりしてきたことに、妻の我慢が限界に達して起るのです。相手を理解しようとするのが大人の関係では、どうしたらよいパートナーとして添い添うことができるのでしょうか。今まで経済中心、仕事一筋に打ち込んできた男性に家庭や地域にも目を向けて欲しいのです。

子どもから手が離れ、働きながら、趣味やボランティアなど地域で活動しているのは女性です。

女性も社会性と責任感を身につけ、男性も仕事以外の生きがいを見つけて、妻の成長を見ながら夫も一緒に成長する。そこには新しい発見があるはず。若い時から本音でぶつかりあひ、話し合いながら、少しずつ歩み寄る習慣をつけてください。自分もたくさん欠点を持った人間だと認め、その上で相手のことを理解しようと努力するのが大人の関係でしょう。

# 夫のあたたかいまなざしに 包まれてようやく母親になれた

1971年頃

現在



～静岡市在住～  
**〈夫〉** 林 豊太郎さん \* **〈妻〉** 林 光江さん  
 ◇結婚年数：24年  
 ◇家族構成：夫婦(50～60代) 32歳(男)、22歳(男) 37歳(男)(既に独立) 35歳(女)(既に独立)  
 ◇結婚を決意させた事  
 〈夫〉親身になって3人の子 〈妻〉夫が3人の子も達を抱え、父子家庭 ども達の世話をしてく として苦労をしている姿を見かね、子 れる妻の様子を見て ども達に関わっていくうちに  
 ◇趣味  
 〈夫〉自分史など文章を書くこと 〈妻〉三味線・舞踊



**再婚と同時に三児の母**  
 夫は当時、三人の子を抱えての離婚でした。映画技師という早番・遅番のある仕事の合間をぬって、子ども身の回りの世話に追われていました。私は東京で住込みの美容師として十七年間働き、その後結婚、やがて離婚。逃げるように静岡に戻ってきました。しかし、当時「出戻りは恥」と世間体を気にする実家へは戻れませんでした。それまで身につけた技術を生かせる美容院で働きはじめたのが縁で、夫と知り合いました。その頃夫の家に遊びに行く子ども達が「おばちゃん！お兄ちゃんがいじめたの」と泣き出したり、「おばちゃん、泊まっていてね」と甘えるように私の体に戯れてきました。結婚の話になった時、子どもを産んだことがない私は、一度に三人の母親になることに、不安を感じました。でも、子どもたちと接し、子どものあどけない表情を見ているうちに、私の心の中に少しずつ、この子ども達だけはしっかりとみようと思うようになっていったのです。  
 私は、子ども達に「お母さんになるからには怒るよ。叩いたりするよ。いいね」と言うと「うん、いいよ！」という言葉を受け、結婚をしました。夫四十二歳・妻二十三歳での再婚でした。  
**二人の間に子どもができた！**  
 私は、子ども達の本当の母親になろうと体当りでぶつかっていききました。三十六歳の時、私は妊娠をしました。その時、三人の子ども達と区別なく育てることが出来るか迷いました。ちょうど反抗期の息子は、私の妊娠した事実を素直に受け入れることは出来ず、反抗的な態度に私は苦しみました。周囲の非難や反対もある中で悩んだ

末、やはり、私は自分の子どもを育ててみたいと決心し、産むことにしました。です。そんな時、夫は私たちのやりとりを黙って見守っているだけでした。でも、このことが私と息子たちの結び付きを強めてくれたのではないのでしょうか。当時、共働きとはいえず、食べ盛りの子ども達なので、経済的に苦労しました。三男が一歳になった時、自宅で美容院を開業しました。汗だくにくになり、赤ん坊を背負って仕事をしている私を手伝い、子守りをしてくれたのは、なんと一番反抗的だった長男でした。いつの日か妻との日々を振り返りたい私(夫)は、普段、妻には話してませんが、これだけ親身になってくれる妻のおかげで、子ども達が一人前に育ったことに感謝しています。  
 長男が大学を卒業し、一人住まいを始めたときに、私に内緒で息子の手助けをしていたのは妻でした。現在、親となった息子は、たまたま私達の所に顔を出し、入るなり「お母さん達？」と聞き、いなるとすぐ帰ってしまいます。長女が結婚をする時、妻は娘に「嫁ぎ先の両親や夫に可愛がられるように、家庭を大事にしなさいよ」という言葉を贈っていました。娘も家庭を持ち、三人の子どもの母親になって、はじめに親としての苦労も知ったのか、今では妻のことを「お母さん、お母さん」と言って感謝しているようです。  
 結婚して二十五年目。最近、妻は三味線と舞踊を習い始めました。私も仕事の傍ら、自分の生い立ち、両親のこと、亡き姉として弟のことを綴った自分史第一部「家族の歩み」を執筆中です。二部作に妻とみょうかと心の中で稿をあたためているところです。

両親の役割として、一般に父親は切ることと決断や意志を重視し、子どもに社会性を身につけさせていきます。母親は、子どもの心を優しく包み込んでいくのです。できのいい子ども悪い子ども、我が子としてまこと受け止めてあげましょう。  
 たとえ、父子家庭、母子家庭であっても心配はいりません。一人が、場合に応じて、両方の役目を果たしていけば、子どもはきっと健全に育っていくでしょう。  
**愛情とは配慮やまなざしです**  
 ところで、女子非行は、そのほとんどが性非行と結びついています。ある少女がこんなことを書いていました。私はあなたをちっとも好きではないけど、あなたが私を好きというなら私は、あなたの喜びをすることをする。私は、あなたの喜びをすることをする。自分の弱さや寂しさをうめてくれるもの。一番は親の愛情を心から求めています。  
 親として大切なことは、①しっかりと子どもを見ていること②現実の問題から逃げないことです。愛情とは、その子に対する配慮やまなざしです。子どもはうるさく言われると反発しますが、親が温かく見守ってくれている雰囲気は心地いいのです。  
 また、人間は弱いもので、現実の問題からつい目をそらしがちです。子どもの服装や友達関係で、いつもと違う様子が見られたら、早めに対処することです。特に父親には、社会的体面や仕事の忙しさを理由に、家庭の問題から逃げないで言いたいですね。  
 子どもは、自分の心で自分で決着をつけて立ち直っていきます。でも、その努力を認めてくれる大人達の存在が何よりの励ましとなるのです。

# ともだち夫婦が、 ともだち家族になった!!

～生まれてきてくれて、ありがとう～

1983年頃

現在



～浜松市在住～  
**〈夫〉** 長田 治義さん \* **〈妻〉** 長田 順子さん  
 ◇結婚年数：12年  
 ◇家族構成：夫婦(30代)、10歳(女) 7歳(女)、夫の母、妹  
 ◇結婚を決意させた事  
 〈夫〉いつも一緒にいたかったから 〈妻〉いつも一緒にいたかったから  
 ◇趣味  
 〈夫〉子どもと遊ぶ事 オシャレ 〈妻〉子どもと遊ぶ事 オシャレ



**子どもは仕事中心の父親の背中をみて育つ?**  
 「今年の正月は、パチンコに明け暮れるとするか…」職場で同僚がこんなことを話していると、なんでもつたいないことを言うんだらうと思います。正月休みくらいじゃありませんか、家族と一緒に過ごせるのは。大掃除だつて、家族みんなでひとつのものを経験できて楽しいじゃないですか。窓ふきだつて娘とオシャレししながらキュッキュッとね。  
 でもね、私も次女が生まれるまでは、仕事中心の父親で、子どもはそんな父親の背中を見て育てば十分だなんて思っていました。  
 父の胸の中で、初めてお乳を飲んだ娘次女の梨沙が、生まれて初めてお乳を飲んだのは、私の胸の中でした。梨沙は難産で、母親か、この子の命か、という状態でした。そのため、子どもは未熟児専門病院へ入院。毎日、妻の母乳を持って私は娘の所にいきました。子どもは身体に呼吸器の障害をもって生まれてきましたので、看護婦さんが、お乳をやっても上手に吸えない状態でした。  
 娘を抱くのも慣れない自分に、「ああ、初めの子どもにちゃんとしておけば…」と情けなくなりました。「ちゃんとおとうさんって分かっているんですよ」と看護婦さんに励まされ、私の胸の中で、娘は生まれて初めて自分の力で百ccのお乳を飲んだんです。  
**梨沙が生まれて本当の家族になった**  
 私たちの会話はやっぱり子ども達のことばかりです。  
 梨沙が生まれてからは、これまで中心であった教育などは、肩の力を抜いて、新しい事柄にであうたび、夫婦で一番いい方法を考えているようになり

ました。  
 家族の間でも、お互いに困っている時には、誰かが手を出してあげるようになり、一緒に頑張らなくてはならないという気持ちでした。身障児だということさえ思い悩み考える暇なく、自然に受け入れて生きてきました。  
 当時、まだ三つの長女麻維もそうでした。子どもの名前をつける時、まだ意識がはっきりしていない妻に変わって、私と一緒に考えてくれたのは麻維だったのです。  
 麻維とも向き合うことができ、私たちは、一緒に考え、楽しみ、遊びあえる仲良しの友達みたいな家族になりました。梨沙が生まれてなかつたら、私は、未だに仕事中心の父親だったし、現在の生活はなかつたと思います。  
 ただ一つ心配なのは、子どもより親のほうが先にいなくなってしまうことです。  
 妻に恥ずかしいからやめなさいって言われるんですけど、私は毎日眠って二人の娘の枕元で囁くんです。「二人とも、生まれてきてくれてありがとう。う。う。」  
**オシャレが大好きなカツブル**  
 私妻と夫は、高校時代からの友達だったのが縁で結婚しました。私たちは、独身時代から一緒に、洋服のショッピンクや、美容院にいったりして、「これがいんじゃない？」とオシャレをするのがとても好きです。  
 でも、夫はオシャレ以外に、これといって趣味がないのでゴルフを勧めました。でも、「やっぱり、子どもと遊ぶほうがいい！」なんて言うんです。たまたまは家族から解放されて、自分の時間も持つてほしいと思つて勧めたんですけどね。

## 専門家からのご意見

あたたかな愛情が  
子ども心をひく  
鈴木 理包さん



プロフィール  
現職/静岡少年鑑別所長

**十四歳は厄年**  
 「十四歳は厄年」と言われるように、どこでも子でも非行に走る可能性を持っています。現代社会はそれだけ、子どもの欲望を刺激する要素が多いのです。  
 ところで、ある子どもが学校で自転車を盗まれたとします。その子は大切な物がなくなつた事以上に、自分がいじめられているという事実がショックを受けます。プライドがあるので、親にもなかなか打ち明けられません。もちろん、やった方も見つかれば叱られますし、たとえ見つからなくても良心の呵責に悩むでしょう。非行は、やった方も受けた方も、心が深く傷ついてしまふんですね。  
**ブレーキをかけるのは両親の力**  
 それでは、子どもの非行を防ぐにはどうしたらいいのでしょうか。私はブレーキをかけるのはやはり、両親の力だと思えます。(あなたの)お子さんは、「非行仲間より家族という方が楽しい。こんなことをしたら親が悲しむだろう」と感じていますか？